



▲荷風撮影 玉の井界隈夜景



▲お雪のモデルと思われる女性 (秋庭太郎推定)

関東大震災以後に発展した私娼街玉の井。ここを舞台に書かれた『暎東綺譚』には、社会のひかたで暮らす女性たちが登場します。私娼お雪を「ミューズ」と描いたように、蔑むでもなく憐れむでもなく、彼女たちを真摯に見つめた荷風の姿が作品の中から浮かび上がってきます。



▲暎東綺譚 (昭和12年 岩波書店)

第4章

玉の井はエトピア

(昭和)



▲ロック座楽屋で踊子たちと

疎開生活の果てに、昭和21年に市川に移り住んだ荷風。昭和23年頃から浅草通いを再開し、踊子たちの陽気な会話に黙って耳を傾けるのが一番の楽しみでした。戦後の困難期の中で生き抜くために、過酷な職業に身を投じた女性たちを、『吾妻橋』などの小説をとおして描き続け、昭和34年に市川で息を引き取りました。



▲京成菅野駅にて

第5章

新しい時代の到来

(昭和)

平成29年度文学ミュージアム企画展 「断腸亭日乗」起筆百年を記念して **永井荷風展**

永井荷風展の表紙デザインより

11月3日(祝) ~ 2018年 2月18日(日)

荷風の見つめた女性たち

永井荷風展の表紙デザインより

市川で晩年の14年間を過ごした文豪・永井荷風。荷風が日記文学の最高峰と評される「断腸亭日乗」を書き始めてから今年が百年目にあたります。文学ミュージアムでは、これを記念した企画展「永井荷風展—荷風の見つめた女性たち—」を開催します。本展では、荷風が、明治、大正、昭和の時代を生きぬく女性に寄り添い、見つめつづけたその眼差しを時代によって紹介します。

☎320-3334文学ミュージアム

平成29年度 市川市文学ミュージアム企画展 「断腸亭日乗」起筆百年を記念して 永井荷風展 荷風の見つめた女性たち

11月3日(祝) ~ 平成30年2月18日(日)

平日 午前10時 ~ 午後7時30分  
祝日 午前10時 ~ 午後6時  
※入室は開館時間の30分前まで

休館日 月曜日(1月8日、2月12日は開館)、11月30日(木)、平成30年1月9日(火)、31日(水)、2月13日(火)、年末年始(12月28日(木) ~ 平成30年1月4日(木))

¥一般500円(400円)、65歳以上400円、高大生250円(200円)、中学生以下無料  
障害者手帳をお持ちの方と付き添いの方1名無料。( )は25名以上の団体料金

関連イベント

☎3203334文学ミュージアム

荷風の見た映画「パリの恋人」1997年上映会

出演 オードリー・ヘアパン、フレッド・アステア

11月25日(土)午後2時  
場メディパーク市川グリーンスタジオ  
入着240人

講演会&対談

12月2日(土)午後2時  
調川三郎氏(評論家)  
対談者 持田敦子氏(日本近代文学研究者)  
場メディパーク市川グリーンスタジオ  
入着240人

ひとり語り公演「暎東綺譚」

出演 長浜奈津子氏(俳優座女優)

11月19日(日)、12月10日(日)、平成30年1月27日(土)、2月3日(土) いずれも午後2時から  
場 企画展示室(入室には観覧券が必要です)

ギャラリートーク

11月19日(日)、12月10日(日)、平成30年1月27日(土)、2月3日(土) いずれも午後2時から  
場 企画展示室(入室には観覧券が必要です)

▲図録販売中 (1,000円)



▲上海にて、左より母 恒、壮吉、弟 威三郎、父 久一郎

永井杜吉(筆名永井荷風)は明治12年、官僚の父と江戸趣味に通じていた母との間に生まれました。母は歌・舞・音曲を愛し、小説を好んだ女性でした。荷風は24歳の時アメリカ・フランスへ遊学。西洋文化に触れるなか、異国の女性イデスと出会います。その体験をまとめた『あめりか物語』『ふらんす物語』には、日本とは異なる異国の女性たちの姿がいまも描かれています。

第1章

異国女性の気風

(明治)

荷風の見つめた女性たち

永井荷風展の表紙デザインより

永井荷風展の表紙デザインより

交通アクセス

「JR総武線」本八幡駅下総中山駅から徒歩15分  
「都営新宿線」本八幡駅から徒歩20分  
「京成線」鬼越駅から徒歩10分  
「東武」京葉道路 市川インターから5分  
駐車場はありませんが、できるだけ公共交通機関をご利用ください。

文学ミュージアム (メディパーク市川2F)

市川C 京葉道路

開催に寄せて

監修 川本三郎(評論家)

永井荷風は昭和20年3月10日の東京大空襲で、住み慣れた東京の自宅を焼かれたあと流浪の身となった。戦後、ようやく市川に移り住み、緑の多い町で安らぎを得た。

市川市は荷風を大事に顕彰し、これまでも三回荷風展を開いている。今回は、荷風が愛した女性たちに焦点を当てる。荷風の新しい魅力を発見していただきたい。

▲つゆのあとさき (昭和6年 中央公論社)

第3章

最先端のカフェー

(大正から昭和)

関東大震災のち東京がモダン都市へと生まれ変わり、銀座では、エプロン姿の女給が働くカフェーが台頭してきます。荷風は、新たな盛り場となったカフェーへ頻りに通い、作品「つゆのあとさき」の中でカフェーの女給という新しい生き方の女性を描いています。

第2章

憧れの花柳界

(明治から大正)

明治維新後、新興の芸者街となった新橋。荷風は花柳界に親しむなかで、『腕くらへ』『新橋夜話』など、新橋芸者として生きていく女性たちの強さ、儚さを作品に描いています。



▲大正3年に荷風と結婚した新橋巴家 八重次